

# 救い主の 最後の 孤独な旅

教会機関誌  
チャケル・ワードレイ

**救**い主は、現世の生涯で数多くの旅をされました。幼子のときにはベツレヘムを出てエジプトへ旅しましたし、荒れ野で40日間旅し、教導の業の中で、町々や村々、家々を訪れては教え、癒し、祝福するなどして、数々の旅をされました。しかし、救い主が独りで歩まなければならない旅がありました。それは、主以外に耐えることのできない旅でした。

ECCE HOMO, BY LOUIS ROYER, RIJCKSMUSEUM

「復活祭の日曜日に、わたしたちは世界史上最も長く待ち望まれ、栄光に満ちた出来事を祝います。それはすべてを変えた日です。その日、わたしの人生は変わりました。皆さんの人生も変わりました。神のすべての子供たちの行く末が変わりました。」

大管長会第二顧問 ディーター・F・ワークトドルフ管長  
「神の光をもたらす希望」『リアホナ』2015年5月号, 107



Simon Dewey

O MY FATHER, BY SIMON DEWEY

## 比類ない苦しみ

「**キ**リストがゲツセマネで行われたことの真の重要性はわたしたちには分かりません。

わたしたちが知っているのは、御父が授けられた苦き杯を飲み干すときに、主があらゆる毛穴から血の汗を流されたことです。

わたしたちが知っているのは、主が肉と霊双方の苦しみに遭われたことです。それは死を味わわずには人が耐えることのできないものでした。

わたしたちが知っているのは、人には理解できないある方法で主の苦しみが正義の要求を満たし、悔い改めた人々を罪の苦痛と罰から解き放ち、主の聖なる御名を信じる人々に憐れみが授けられるようになったということです。

わたしたちが知っているのは、主が地に伏してその肩にかかる果てしない重荷の痛みと苦しみを受けられたことです。主は身を震わせ、苦き杯をできることなら飲みたくないと思われたほどでした。」

十二使徒定員会 ブルース・R・マッコンキー長老(1915 - 1985年)  
「ゲツセマネの清めの力」『リアホナ』2011年4月号, 16 - 17

**自分に当てはめる**——わたしたちは常に理解していないかもしれませんが、救い主は贖罪のさなかにあらゆる形の苦痛を経験されました。救い主は、骨折から最も深刻な慢性疾患に至るまで、あらゆる肉体的な苦痛を理解しておられます。うつや不安神経症、依存症、孤独、悲しみといった精神疾患のもたらす暗闇と絶望を感じられました。また、人類のあらゆる罪を身に受けたため、あらゆる霊的な傷の痛みも感じられました。

十二使徒定員会のデビッド・A・ベドナー長老はこのような教えています。「自分の弱さに悩むとき、『この苦しみはだれにも分からない』と声を上げることがあるかもしれませんが、しかし、神の御子はすべてを完全に理解しておられます。わたしたち一人一人の重荷を負われたからです。」「容易に重荷に耐えられるように」『リアホナ』2014年5月号, 90)